

アクション・リサーチを活用した 高等学校における英語プレゼンテーションの学習

菱田 信彦*

Teaching High School Classes for English Presentation Using the Method of Action Research

Nobuhiko HISHIDA

要 旨

本論では、「アクション・リサーチ」の手法を活用して、高等学校の英語の授業で生徒に英語プレゼンテーションのやり方を学習させる方法について考察する。アクション・リサーチとは、教育理論や技術を実際の授業の中で試行し、成果を検証した上で改善につなげる手法である。

日本の高校生が英語プレゼンテーションを苦手とするのは、英語の語彙・文法・発音といった技術的要因よりもむしろ、周囲と同じ言動をとることを求め、独自の視点や意見をもつことをよしとしない日本文化に起因するところが大きい。一方、英語は自己主張に適した言語であり、具体的なことを論理的に述べるのはむしろ英語の方が容易な場合もある。そこで「自分の意見を表明し、それを他者とのコミュニケーションにつなげる力を養成する手段として英語プレゼンテーションを行う活動を、高等学校でいかに実現するか」というリサーチ・クエスチョンを設定した。仮説としては(1)語彙とレシテーションの訓練による苦手意識の払拭、(2)「自分だけの意見を述べる」大切さを知ることによるモチベーションの向上、(3)協調学習によりクラス内コミュニケーションを密にすることによる学習効果、の3点を設定し、高等学校3年次の選択科目で週に1回、計15回の授業を実施するという想定で授業計画を作成した。まだ実際の授業での試行に至っていないが、今後部分的にでも授業に導入してその効果を検証し、改善につなげたい。

キーワード：英語教育、高等学校英語授業計画、プレゼンテーション、ライティング、アクション・リサーチ

*教授 英文学

はじめに

本論は、「アクション・リサーチ」の手法を活用して、高等学校の英語の授業で生徒に英語プレゼンテーションのやり方を学習させる方法について考察することを目的とする。アクション・リサーチとは、教育理論や技術を実際の授業の中で試行し、成果を検証した上で改善につなげる手法である。佐野によれば、それは次のような段階を踏んで行われる。

- (1) 問題の発見：直面している事態から扱う問題を発見する。
- (2) 事前調査：選んだ問題点に関する実態を調査する。
- (3) リサーチ・クエスションの設定：調査結果から研究を方向づける。
- (4) 仮説の設定：方向性に沿って、具体的な問題解決の対策を立てる。
- (5) 計画の実践：対策を実践し、経過を記録する。
- (6) 結果の検証：対策の効果を検証し、必要なら対策を変更する。
- (7) 報告：実践を振り返り、一応の結論を出して報告する。

(佐野 6)

プレゼンテーションの学習は、語彙や文法などの英語基礎力はもちろん、ライティングやレシテーションの力、表現力や他者とのコミュニケーション能力など、さまざまな要因がからむ複雑かつ総合的なものである。目標を明確に設定した上で、段階を踏んで生徒の成果や反応を検証しつつ授業のやり方に改善を加えていくこの手法は、英語プレゼンテーションを学ばせるのに非常に適していると考えられる。

筆者は大学の英語学科でプレゼンテーションを含む英語の授業を担当しているが、その経験から、高等学校の段階で英語プレゼンテーションの経験を積むことが大切であると考えようになった。高大連携の重要性が叫ばれる時代、大学教員の経験や研究成果を高等学校へフィードバックし、高等学校の学習を大学での学びにつなげる試みは意義あるものだと考える。そのため、高等学校において英語プレゼンテーションの学習を行うことを想定し、アクション・リサーチを活用した授業の実施案を以下のように作成した。

授業の対象としては、高等学校普通科の3年次生で、英検3級程度と英語力はあまり高くないが、英語でのコミュニケーションや海外留学などに関心を持っている生徒を想定する。そのような生徒が20名程度、3年次前期に選択科目として週に1回、全部で15回の授業を受けるという設定で授業計画を作成する。なおこれは、筆者が大学1年次生にプレゼンテーションを

指導した経験にもとづき仮想的に作成したもので、高等学校での検証を経たものではないことをお断りしておく。

1. 問題の発見

筆者が大学で教えている学生には、英検準2級程度とそれなりの英語力がある者であっても、プレゼンテーションを苦手とする、もしくは自分はプレゼンテーションが苦手だと考えている学生が多い。それはもちろんさまざまな要因によるものである。まず、語彙や文法などの基礎力の不足、文型や構文の知識が欠けているため適切な英文が書けない、パラグラフ・ライティングによって論理的に話を進めていくやり方を習得していない、さらに発音の訓練が不十分で、人前で英語を話すことに気後れがする、などが考えられる。ただ、学生の苦手意識がこのような「英語」に関することだけにとづくとは考えにくい。母語である日本語を用いて、たとえば自己紹介のような簡単なプレゼンテーションをさせても、多くの学生が英語で行った場合と似たような弱点を露呈するからだ。

学生に自分の家族や住んでいる町などについて日本語で紹介するようにいうと、たいいていの学生がなるべく当たり障りのない、他の人が言うのと同じようなことを言おうとする。家族は何人で、お父さんの仕事はこれこれ、住んでいるところは何々市で、どこそこ駅からバスで何分、と、まるで身上調査書を読み上げているようで、少しの面白みもない。そこで学生に、「自己紹介というのは自分に関心を持ってもらってコミュニケーションのきっかけにするためのものだから、何か自分をアピールする情報を入れないとだめだよ」と言うと、彼らはキョトンとする。そこで、「たとえば、“住んでいるところは〇〇市です”と言うだけじゃ面白くないけど、“ディズニーランドへ自転車で行けます”って言えば関心を引けるでしょ。そういう、聞いている人が“えっ”と驚いたり“へーえ”と思ったりする“ネタ”を入れなきゃ」とアドバイスすると、彼らは急にざわつきだす。つまり彼らには、自分をアピールして聞き手の関心を引きつけることを「やっていい」のだという感覚がないのである。

これは私見にすぎないが、日本人の多くは、自分の属する集団の中でなるべく目立たないよう努めることをよしとする文化を共有している。周囲の人々の様子をうかがってできるだけ同じような発言や行動をすることが求められ、独自の視点や見解をもつことは望ましくないとされ、それに反すれば何らかのペナルティを受ける。このような規範は、子どもの遊び仲間のような小規模な集団であっても同様に、いやむしろさらに強固に機能する場合がある。幼いころからそのような文化規範の中で育った学生にとっては、自分が他の人々と異なる点を強調し、それによって自分に関心を引きつけることは、「本来」ならペナルティの対象となるようなネ

ガティブな行為なのだ。

ところが英語圏では、まさにこれがコミュニケーションにおいて最も重視される点である。英語圏の人々の多くは、自分の立場や見解を明示し、それが他の人々と異なる点を強調し、また他人の意見に耳を傾けて、自分と相手の見解における共通点と相違点を検証することこそが「コミュニケーション」であるとする文化をもっている。日本人が海外で活動する際に周囲の人々とのコミュニケーションに問題を抱えるのは、英語の語彙や文法、リスニングや発音といった技術的な要因よりも、むしろこのような文化的要因に起因するが多いと考えられる。

このことは、逆に言えば、英語が自分の意見の表明や他者との見解の相違の検証といった活動にきわめて適した言語である可能性を示している。感覚的で一般的なことを述べるには日本語が適しているが、具体的なことがらについて論理的に語ろうとするとむしろ英語の方が使いやすい、というのは、ある程度の英語学習者であれば多くが実感していることではないだろうか。英語の学習のためにプレゼンテーションを行うのではなく、自分の意見を表明してそれをコミュニケーションにつなげるために英語を「ツール」として使う活動を高等学校の段階でいかに実現するか、というのが、本論における筆者の問題意識である。したがって、以下に提示する授業計画案は次のようなことに重点を置くものとなる。

- ①英語を通して生徒に自分をアピールし、他の人との違いを強調する体験をさせる。
- ②パラグラフ・ライティングなどを通して、英語ではどのような話の進め方が「筋の通った」ものだと受け取られるのかを理解させる。
- ③生徒同士のペアワーク、相互評価、質疑応答などを通して、プレゼンテーションがコミュニケーションにつながることを実感させる。

これらを実現するため、この授業で行うプレゼンテーションは自分の身近な問題について何らかの意見を表明するものとする。また、語彙を身につける活動は行うが、教員による文法や構文の指導はできるだけ避け、生徒どうしがお互いのプレゼンテーションの内容や構成、言葉づかいなどを検証しつつ完成を目指すという形をとる。

2. 事前調査

(1) 語彙サイズテスト

望月による「語彙サイズ特定テスト」(望月)を用いて生徒の語彙力を測定する。

(2) 英検 3 級筆記試験

英検 3 級の筆記試験から問題を抜粋し、20 分程度で実施できる模擬試験を作成、実施する。これにより生徒にどの程度文法や作文、読解の力があるかを推定する。

(3) アンケート

生徒に対してアンケートを実施する。下記の①～⑤の項目については「1. そう思う」、「2. どちらかといえばそう思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまりそう思わない」、「5. そう思わない」から 1 つを選択する。⑥の項目は自由記述とする。

- ①自分の意見や考え方をしっかり持っている方だと思いますか。
- ②初対面の人に自分から話しかけて親しくなることができますか。
- ③英語の授業は好きですか。
- ④外国人と英語で会話できるようになりたいと思いますか。
- ⑤海外に留学してみたいと思いますか。
- ⑥人前でスピーチをしたり、調べたことを発表したりしたことはありますか。あるなら、その時どう感じましたか。ないなら、やってみたいと思いますか。思うことを自由に書きなさい。

3. リサーチ・クエスチョンの設定

自分の意見を表明し、それを他者とのコミュニケーションにつなげる力を養成する手段として英語プレゼンテーションを行う活動を、高等学校でいかに実現するか。

4. 仮説の設定

上記のリサーチ・クエスチョンにもとづき、このアクション・リサーチでは以下の 3 つの仮説を設定する。

【仮説 1】 授業の最初にボキャブラリーとレシテーションのトレーニングを合同で行うことにより、生徒に自信をつけさせ、英語の口頭発表に対する気後れを軽減することができる。

(1) ボキャブラリーのトレーニング

佐野は、生徒に語彙に関する知識を導入し定着させるには、生徒にとって興味のある内容の

リスニング教材を聞かせて導入する、単語カードで意味と発音の確認をさせる、さらに単語ゲームで使わせるなど、繰り返し接する機会を与えることが重要だと述べている（佐野 37）。しかし、授業のはじめにごく短時間で行う必要があるため、次のようなやり方を考えた。

- ①前もって、3,000 語レベルまでの基礎的な単語・成句から 500 語句程度の単語集を作成し、各語句の日本語の意味も付記して生徒に配っておく。音声データを伴う教材があればなおよい。主として英語表現に馴染ませることが目的なので、プレゼンテーションとはとくに関係のない語句でもよい。
- ②生徒を 3 人ずつのグループに分ける。人数により余りが出る場合は 4 人のグループがあってもよい。各グループのメンバーを A, B, C とする。
- ③グループごとに固まって座り、A が B に単語の意味を日本語で耳打ちし、B がそれに相当する英単語を C に言う。C はその単語を英語で書きとる。役割を交代しながら続け、制限時間内に最も多くの語句を正確に書きとったグループが勝利する。
- ④日本語を介さないことが望ましいのであれば、A が B に耳打ちした英単語を B が絵や図にして C に示すというやり方も考えられる。しかし時間を使いすぎないように配慮が必要。
- ⑤この方法であれば、英語の語句の発話、聴解、スペリング、そして意味の確認を一連の作業の中で行うことができる。

(2) レシテーションのトレーニング

音読の訓練としては、教員についてリピーターする、音声教材を用いてリピーティングやシャドーイングを行うなどのやり方が一般的である。しかしこれだけではやや受動的な学習となるため、よりインタラクティブな活動とするために次のようなやり方を考えた。

- ①平易な英語によるスピーチや論説文の一部を取り、生徒 1 人につき 1 文となるような（すなわち生徒が 20 人なら 20 文）教材を作成する。内容理解が主な目的ではないので、パラグラフの途中で切れたりしていてもかまわない。日本語訳もつけておく。音声教材が付属していることが望ましい。
- ②生徒 1 人に 1 文を割り当て、それを暗記するように言う。
- ③まず 1 番目の文を割り当てられた生徒が立ち上がって自分の文を暗唱し、着席する。すぐ続けて第 2 文担当の生徒が立ち上がって同じように暗唱する。誤りがあれば正しく暗唱できるまで繰り返す。このようにして 20 文を 20 人で輪読する。
- ④ 20 文を暗唱し終えるまでのタイムを測定する。

- ⑤毎回担当の文を変えて輪読を行い、タイムの向上を目指す。2チームに分けてタイムを競ってもよい。
- ⑥この方法をとれば、レシテーションの訓練になると同時に、スピーチや論説文で用いられる英語表現を自然と身につけることができる。

【仮説2】「自分だけの意見を述べる」ことの大切さを理解させ、そのための基本的なやり方を身につけさせることにより、プレゼンテーションに対するモチベーションが上がり、語彙や文法など基礎力の向上にもつながる。

この仮説の検証は次のような段階を踏んで行う。

(1) 日本語による自己紹介

自分の家族、住んでいるところ、趣味などについて自己紹介させ、その中に必ず聞き手を「えっ」と驚かせたり「へーえ」と思わせたりするような「ネタ」を入れるよう指示する。あえて日本語で行うのは、プレゼンテーションについて自分が抱えている問題が必ずしも「英語」に関するものだけではないことを自覚させるためである。日本語の発表であれば、口頭発表する際の姿勢や身ぶり手ぶり、アイコンタクトなどへ意識を向けることもより容易になる。

(2) テーマの選定

プレゼンテーションの成否は、テーマを選ぶ段階で八割がた決まるということを理解させる。次のような問題をテーマとしてとり上げれば、有意義なプレゼンテーションにつながりやすい。

- ①自分にとって身近で、切実な問題
- ②それについて意見を述べる際に具体的な根拠を示しやすい問題
- ③聞き手にとって理解・共感しやすい問題

(3) 資料の収集

図書館を利用して、自分のテーマに関連する新聞や雑誌の記事を少なくとも1つ探し出し、必要な部分を書き写すか、コピーして切り貼りする作業を行う。日本語の記事でかまわない。インターネットが利用できる環境であれば、Web新聞の記事を検索したり、CiNiiで雑誌論文を検索してオープンアクセス資料を活用したりしてもよい。

ここでも目的はプレゼンテーションに使う資料を探すことではない。肝心なのは、プレゼンテーションにおいて「資料」とは何かを理解させることだ。プレゼンテーションは集めた資料の内容を「まとめた」ものではなく、資料の内容を踏まえた上で「そこに書かれていない」新たな何かを提示するものである。他の人が言っていないこと、自分にしか言えないことを述べようとするのがプレゼンテーションだ、ということを目覚めさせる。

さらに、資料に書かれていることと自分の意見は明確に区別しなければならないということ、つまり「剽窃」を避けることについても教える。

(4) Mapping

自分のテーマに関連のありそうな英語の語句をできるだけ多く見つけ、ノートなどに書きとる。相互関係が強いと思われる語句どうしを線で結ぶなどして“Mapping”を行う。

(5) Outline

MappingをもとにプレゼンテーションのOutlineを作成する。基本的には表1のようにIntroduction, Body, Conclusionの三段構成をもつものとする。

ここでとくに重要なのはIntroductionの②、つまりメッセージの提示である。自分が行おうとしているプレゼンテーションが、テーマとしている問題について意見を述べることを目的とするものであること、そして「意見」とは、原則として、ある考え方についてYesかNoかを明らかにするものだということを理解させる。たとえば、児童英語教育をプレゼンテーションのテーマとするなら、小学生以下の子どもたちが英語を学ぶことについて自分が賛成なのか反対なのか、すなわち、児童英語教育をさらに推進すべきだと思っているのか、それとも幼いうちから英語を学ぶ必要はないと思っているのかをはっきりさせなければ、意見を述べたことにならない。これは日本人が非常に見落としやすい点である。

そしてBodyでは、自分のメッセージの裏づけとなるような論述を3つ程度のトピックによっ

表1

Introduction	①プレゼンテーションのテーマを示す。 ②自分がそのテーマについてどのようなメッセージを伝えようとしているのか明らかにする。
Body	①テーマに沿って2つから4つのトピックを提示する。 ②トピックごとに具体的な事例やデータを紹介しつつ論を進める。
Conclusion	①メッセージを再提示する。 ②印象的な発言でスピーチをしめくくる。

表 2

Introduction	Theme: English education for children Message: Children in Japan should have more opportunity to learn English.
Body	Topic 1: You don't feel too self-conscious when you speak English if you start learning English from early childhood. Topic 2: Early English learning is an effective way to acquire good listening skills. Topic 3: English learning develops children's ability to communicate with others.
Conclusion	Early English learning is essential for developing practical English skills. Children in Japan should start learning English as early as possible.

て展開していく。児童英語教育の推進に賛同する意見を述べるなら、トピックはたとえば、幼少期から英語を学ぶと「Topic 1：英語への苦手意識を抱かずにすむ」、「Topic 2：リスニング力を身につけるのに効果的」、「Topic 3：コミュニケーション力の養成に役立つ」というようになる。メッセージやトピックは、Mapping で得た語句を並べるだけでもよいが、できれば「文」で記すことが望ましい。表 2 に児童英語教育をテーマとした Outline の例を示す。

(6) プレゼンテーションの作成

上記の Outline をもとに、200～250 語程度のプレゼンテーション原稿を作成する。もっとも Outline がすでに 70 語程度あるので、それぞれのトピックにその裏づけとなるような文を少し書き足すだけでよい。プレゼンテーションの構成は Outline の段階でほぼ完成することを理解させる。

重要なことは、Mapping 以降の作業では日本語を介さないことである。日本語の原稿を「英訳」するのではなく、Mapping で得た語句を用いて英語で思考し、英語で文を書く。英語が論理を展開するのにいかに有効なツールであるかを体感するのがここでの目的である。したがって教員は、英語の語句や表現については多少補助してもよいが、文法や構文について指導することは原則として控える。内容理解の妨げとなる global error は必要があれば指摘するが、内容理解にさほど影響しない local error はそのままにしておく。

できれば、CALL 教室などインターネットが使える教室で行うことが望ましい。

(7) グループ練習

3名のグループで口頭発表の練習を行う。この段階でできるだけ原稿を暗記しておくことが望ましい。1名が発表し、他の2名はそれを聞いてプレゼンテーションのテーマ、内容、構成、語彙、文法、表現などについて気づいたことを指摘する。発表の際の姿勢、声の出し方、身ぶ

り手ぶり、アイコンタクトなどについても指摘しあう。

さらに、自分以外の2名のプレゼンテーションに対する質問を英語で準備する。相手に質問を知らせてその回答を準備してもらう。時間があれば質疑応答の練習も行う。

(8) 全体発表

クラス全員の前でプレゼンテーションを発表する。原稿を完全に暗記することは難しいかもしれないが、発表の最中はできるだけ原稿から目を離し、聴衆とアイコンタクトをとるよう努める。

発表後、準備した2名が発表者に質問して質疑応答を行う。もちろん即興で他のグループの発表者に質問してもかまわない。

全体の発表が終わった後、次の【仮説3】で論じる方法で他のメンバーからのフィードバックを受ける。

(9) 推敲と再発表

フィードバックをふまえてプレゼンテーション原稿を推敲し、さらに発表の練習を重ねて、もう一度全体発表を行う。

【仮説3】 プレゼンテーションの構成、原稿作成、発表練習、発表などの活動を「協調学習」によって行うことにより、学習効果が向上するだけでなく、プレゼンテーションは他者とのコミュニケーションのために行うのだという意識が養われる。

アクション・リサーチにもとづく英語ライティングの授業について分析している安西とJungは、ライティングにおける協調学習の重要性を指摘し、次のように論じている。

協調学習とは、学習者がグループで、同じ目的を持ち、自分たちや仲間の学習を改善するために、一緒に学習する方略のことである。(Johnson, Johnson, & Smith, 1998)。協調学習方略では、学習者は問題解決学習をしたり、知識を構成するために経験を分かち合ったり、また仲間に意見を求める。このような方略は、学習にプラスの作用をし、学習をより深く、そして意味があるものにする。(Palloff & Pratt, 1999; Springer et al., 1999; Susman, 1998)。

(安西 & Jung 13)

また、英語の創作クラスにおけるアクション・リサーチの効果について論じている Lafaye も、自分の創作に対してクラスメートからのフィードバックを受けることが生徒の活動にとってきわめて重要だと指摘している (Lafaye 117)。

本論で立案したプレゼンテーションの授業にとっても、生徒の活動を教員が評価したり添削したりするのでなく、上の【仮説2】で示したようなプレゼンテーションを完成するまでの各段階において、生徒が相互に評価や改善をすることによって、それが新たな視点の獲得や、クラスメートへのより深い理解へとつながっていくことが望ましい。時間の問題もあるが、下記のような活動をできるだけ行いたいと考えている。

(1) 自己紹介

生徒が日本語で自己紹介した際、他の生徒に質問したり、興味を引かれた点についてコメントしたりするようながす。それぞれの自己紹介について2～3名の質問者を指名しておいてもよい。

その際、「よい質問」とは何であるかに意識を向けさせる。相手の話に関心を抱いていることを示し、さらにコミュニケーションを発展させる契機となるものがよい質問であることを理解させる。たとえば発表者が「うちからディズニーランドまで自転車で行けます」と述べた場合、「ディズニーランドは好きですか」と質問するのと、「本当に自転車で行ったことがあるんですか。何分ぐらいかかりましたか」と質問するのでは、その後のコミュニケーションへ発展する可能性が大きく違ってくる。

(2) テーマの選定

それぞれの生徒がプレゼンテーションのテーマを準備したら、3名ずつのグループに分かれ、グループ内でテーマを発表して、他のメンバーのテーマについて質問したり、自分がその問題にどんな関心を持っているかを述べたりする。

たとえば児童英語教育をテーマとするメンバーがいれば、自分が小学校時代にどのように英語に接したかとか、もっとこんな勉強がしたかったとかいったことを述べる。それがテーマに対する問題意識や発想を広げ、次の Mapping の作業で助けとなる。

(3) Mapping と Outline

ここでも3名ずつのグループに分かれ、それぞれのメンバーの Outline について「もっとこんなトピックを導入してはどうか」、「この構成だと話の流れが分かりにくい」といったことを

指摘しあう。

とくに肝心なことは、そのプレゼンテーションがどんなメッセージを伝えようとしているのか、について検証することである。Introduction で提示された「聞き手に伝えたいメッセージ」について意見を述べあい、その問題についてメンバーそれぞれがどのように異なる見解を持っているかを確認する。

(4) プレゼンテーションの作成

ここでは、やはり3名ずつのグループで、プレゼンテーション原稿の構成、語彙、文法、言葉づかいなどについて指摘しあう。語彙や文法が不適切な点の指摘はなるべく生徒どうしで行い、教員の関与は最小限にとどめる。

(5) グループ練習

上記【仮説2】で示したとおり。

(6) 全体発表

発表後、表3のようなフォームを用いてそれぞれのプレゼンテーションを評価する。授業の成績資料とするため、記名評価とする。

英語オーラル・プレゼンテーションの授業におけるアクション・リサーチについて研究した岩井は、受講生の英語スピーチについて相互評価を行わせている。その基準はドラフトについては「内容」、「論理構成」、「正確さ」など4項目、スピーチの発表については「速度」、「内容」、「オーディエンスへの注意」など6項目で、加えて自由記述をさせている。上記のフォームによるものとはほぼ同様の評価方法と考えていい。岩井は、スピーチの訓練をする前とした後で二度、受講生の相互評価について検証し、とくに自由記述のコメントについて大きな変化が生じたとして、次のように報告している。

コメントの総数が大きくなった原因をさらに細かく分析したところ、スピーチの評価では発音のよさや流暢さといった表面的な特徴からスピーチの論理構成と内容について、ドラフトの評価ではとりわけ論理構成についてより多くコメントされていた。では、論理構成のどのような面についてコメントが増えたかということ、スピーチについては導入や結論の導き方、話の展開の分かりやすさ、さらにそのために用いられた連結詞の使用、分かりやすい例の提示などに対するコメントの増加が顕著であることが分かった。ドラフトについ

表 3

プレゼンテーション評価シート		
発表者氏名 _____		月 日
発表題名 _____		
ドラフト	プレゼンテーションのテーマとメッセージが明確であるか。	/10
	Introduction, Body, Conclusion の三段構成をそなえているか。	/10
	メッセージとトピックの関係が適切であるか。	/10
	トピックと、その裏づけとなる事例やデータとのバランスがとれているか。	/10
	語彙, 文法, 表現などに誤りがないか。	/10
パフォーマンス	はっきりした聞きとりやすい声で話しているか。	/10
	英語の発音, イントネーション, 間のとり方は適切か。	/10
	姿勢, 身ぶり手ぶり, アイコンタクトを十分意識しているか。	/10
	原稿を暗記しているか。	/10
	質問に的確に答えているか。	/10
合計		/100
プレゼンテーションの感想		

評価者氏名 _____		

でも似た傾向があり、授業で学習した一貫性や冗長さの問題を指摘したコメントもかなり見受けられた。これらは事前データのコメントにはほとんど見られなかったものである。
(岩井 146)

岩井が論じているように、オーラル・プレゼンテーションの訓練を受けることは他者のプレゼンテーションを「見る目」を養い、それに向き合う姿勢を変える。また他のプレゼンテーションを真剣に聞き、それを評価することが自分のプレゼンテーションへの意識を高め、その改善につながることになる。プレゼンテーションの授業においては、相互評価を含む協調学習は欠かせないものだと考える。

5. 計画の実践

この授業は表 4 のように進める。

表 4

回	目的	内 容
1	事前調査	事前学習：
		授業：語彙サイズテスト，英検3級テスト，アンケート (教員は次回の自己紹介について指示する)
		事後学習：自己紹介の準備
2	自己紹介	事前学習：自己紹介の発表練習をする
		授業：自己紹介の発表⇒お互いに質問，コメントする (教員は次回のテーマ設定について指示する)
		事後学習：プレゼンテーションのテーマを考える
3	テーマ設定	事前学習：テーマ設定の発表準備
		授業：テーマ設定の発表⇒お互いに質問，コメントする (教員は次回の資料調査について指示する)
		事後学習：質問などをふまえてテーマを再考する
4	資料調査	事前学習：資料調査の準備
		授業：・図書館でテーマに関連のある新聞記事などを採す ・資料から必要な部分を抜書きする (教員は次回の Mapping について指示する)
		事後学習：テーマについてどんなことを述べたいか考える
5	Mapping	事前学習：Mapping の準備をする
		授業：・資料をもとに Mapping を行う。 (教員は次回の Outline 作成について指示する)
		事後学習：プレゼンテーションの構成を考える
6	Outline	事前学習：Outline 作成の準備をする
		授業：・ Mapping にもとづき Outline を作成する ・ Outline を3人のグループの中で回覧し，お互いに質問，コメントしあう。 (教員は次回の原稿作成について指示する)
		事後学習：質問などをもとに Outline を推敲する
7	原稿作成	事前学習：Outline のトピックそれぞれにどんな事例やデータを付記するか考える
		授業：・プレゼンテーション原稿を作成する ・作成した原稿を1部プリントして教員に提出する〈第1回〉 ・自分の分もプリントして持ち帰る(データで持ち帰ってもよい) (教員は次回のグループワークについて指示する)
		事後学習：プレゼンテーションの内容や構成を再考する
8	原稿の推敲	事前学習：原稿を読み返して改善すべき点を考える
		授業：・原稿を推敲し，3部プリントする。 ・プリントした原稿を3名のグループの中で配って互いに読み，質問，コメントしあう ・質問などをもとに原稿をさらに推敲する ・完成原稿をプリントして教員に提出する〈第2回〉 (教員は次回のグループ練習について指示する)
		事後学習：原稿をできるだけ暗記する。

アクション・リサーチを活用した高等学校における英語プレゼンテーションの学習

9	発表準備	事前学習：原稿の発表練習をする。
		授業：（教員は前回提出された原稿にコメントをつけて返却する） ・3名のグループの中で発表練習をし、お互いにコメントしあう ・プレゼンテーションに対する質問および回答を考え、質疑応答の練習をする。
		事後学習：コメントをもとにプレゼンテーションのやり方を再考する
10	発表1	事前学習：発表練習をする
		授業：・プレゼンテーションの発表を行う（受講者番号1～7） ・他の生徒は評価シートによって評価し、発表者に渡す
		事後学習：評価シートをもとに原稿と発表のやり方を再考する。
11	発表2	事前学習：発表練習をする
		授業：・プレゼンテーションの発表を行う（受講者番号8～14） ・他の生徒は評価シートによって評価し、発表者に渡す
		事後学習：評価シートをもとに原稿と発表のやり方を再考する。
12	発表3	事前学習：発表練習をする
		授業：・プレゼンテーションの発表を行う（受講者番号15～20） ・他の生徒は評価シートによって評価し、発表者に渡す
		事後学習：評価シートをもとに原稿と発表のやり方を再考する。
13	再発表1	事前学習：発表練習をする
		授業：・プレゼンテーションの再発表を行う（受講者番号1-10） ・原稿を教員に提出する（第3回） ・評価シートを教員に提出する
		事後学習：授業全体をふり返る
14	再発表2	事前学習：発表練習をする
		授業：・プレゼンテーションの再発表を行う（受講者番号11-20） ・原稿を教員に提出する（第3回） ・評価シートを教員に提出する （教員は次回のテストとアンケートについて指示する）
		事後学習：授業全体をふり返る
15	結果の検証	事前学習：アンケートにどう答えるか考える
		授業：語彙サイズテスト、英検3級テスト、アンケート
		事後学習：

6. 結果の検証

- (1) 授業の最初と最後に実施した語彙サイズテスト、英検3級テスト、アンケートの結果を比較し、学生の語彙力や文法力、読解力、さらに英語やプレゼンテーションへの姿勢がどのように変わったかを検証する。
- (2) 評価シート、とくに自由コメントを分析し、プレゼンテーションについて教員が期待する

ような意識や判断基準を生徒が身につけたかどうかを判定する。

- (3) 三回にわたって提出されたプレゼンテーション原稿のそれぞれを, Jacobs・他の ESL Composition Profile によって評価する。これは content, organization, vocabulary, language use, mechanics の5つの項目について, それぞれを 30, 20, 20, 25, 5 点満点で採点し, 100 点満点中の総合点を算出するものである (Jacobs, et al.)。自分だけで書いた原稿とグループワークや相互評価を経た原稿がどのように変化したかを分析することで, この授業方式の効果を量ることができる。

7. 報告

筆者は現在高等学校での授業を担当していないので, この授業計画を高等学校で実践して報告することは困難である。当面は, 大学のプレゼンテーションの授業など部分的に実施しつつさらに改善を加え, いずれは高等学校と連携して実施を実現したく思っている。

まとめ

ここまで, 高等学校で英語プレゼンテーションの授業を行う方策を模索してきた。現実には, 時間的制約や生徒の学力差・意欲の差などさまざまな要因が絡むため, この計画どおりに授業が実施できるかどうかは定かではない。しかし, 協調学習や相互評価をとおして, 自分の意見を積極的に表明することがコミュニケーションの発展につながることを実感し, 生徒が英語プレゼンテーションに興味を抱くきっかけとなるよう工夫したつもりである。少なくとも部分的に実際の授業に活用できるところはあるのではないかと思う。

英語学習のためにプレゼンテーションを行うのではなく, 日本人がしばしば苦手とする, 異なる文化や価値観をもつ相手に対して積極的に自己アピールし, コミュニケーションを築く力を身につけるためのツールとして英語という言語を利用するという考え方は, 英語教育の分野においても異文化間コミュニケーションの分野においてももっと注目されてよいように思う。今後もこのような学習の可能性を模索し, 少しずつ現場での検証へと移していきたい。

引用文献

安西弥生, Insung Jung, 「英語ライティングにおける Wiki 利用の可能性」, 『教育メディア研究』17 (1),

2010, 13-26.

岩井千秋, 「英語によるオーラル・プレゼンテーションの指導効果の探索的検証—学習者の言語産出面の変化に焦点を当てて」, 『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』 11, 2014, 142-155.

Jacobs, H., et al. *Testing ESL Composition: A Practical Approach. English Composition Program*. Rowley: Newbury House, 1981.

Lafaye, Beverley Elsom, 「Asking the Writing Questions? Action Research in the Creative Writing Class」, 『東海学園大学研究紀要：人文学・健康科学研究編』 11・12 合併, 2007, 109-119.

望月正道, 「日本人学習者のための語彙サイズテスト」, 『語学教育研究所紀要』 12, 1998, 27-53.

佐野正之, 『はじめてのアクション・リサーチ—英語の授業を改善するために』, 大修館, 2005.